

# 古墳時代を作った男の話（1）

## 第1章 天日槍の来日説話

2019.1.10 福島 巖(ID:10063)

天日槍<sup>あめのひやり</sup>とは日本書紀では「天日槍」、古事記では「天之日矛<sup>あめのひぼこ</sup>」、他文献では「アマノヒボコ」とも表記されている。日槍は刀・剣・槍、玉、日鏡、熊神籬<sup>くまのひもろぎ</sup>など三種の神器に近いものを持ってきて、これらを但馬国に納め出石<sup>いづし</sup>神社の神宝としたという。天皇は初め播磨<sup>はりま</sup>国に停泊して宍粟<sup>しきわむら</sup>邑にいた日槍に、大友主（三輪氏祖）と長尾市（倭氏祖）とを派遣して彼にやってきた理由を設問した。天日槍は自分を新羅<sup>しらぎ</sup>国王の子であるといい、日本に聖皇がいると聞いたので国を弟の知古<sup>ちこ</sup>に任せて自分は日本への帰属を願ってやって来たと語った。そこで天皇は播磨<sup>はりま</sup>国宍粟<sup>しきわむら</sup>邑と淡路島<sup>いでさむら</sup>出浅<sup>いでさむら</sup>邑の二邑<sup>むら</sup>に天日槍の居住を許したが、天日槍は諸国を遍歴し適地を探すことを願ったのでこれを許した。（日本書紀の垂仁天皇記）

そこで天日槍は、菟道河<sup>うじ</sup>（宇治川）を遡って近江<sup>あなむら</sup>国吾名<sup>あなむら</sup>邑にしばらくいたのち、近江から若狭国を経て但馬国に至って居住した。近江<sup>あなむら</sup>国鏡村<sup>かがみ</sup>の谷<sup>や</sup>の陶人<sup>すえびと</sup>が天日槍の従者となったのは、これに由来するという。また天日槍は但馬<sup>いづし</sup>国出石<sup>いづし</sup>の太耳<sup>ふとみみ</sup>の娘<sup>むすめ</sup>マタオを娶り、彼女との間の子に但馬<sup>いづし</sup>諸助<sup>もろすく</sup>を儲けた。そしてこの諸助<sup>もろすく</sup>は但馬<sup>いづし</sup>日檀<sup>ひならき</sup>杵<sup>き</sup>を儲け、日檀<sup>ひならき</sup>杵<sup>き</sup>は清彦<sup>きよひこ</sup>を、清彦<sup>きよひこ</sup>は田道間<sup>たじまもり</sup>守<sup>もり</sup>を儲けたという。

『古事記』応神天皇記では、その昔に新羅の国王の子の天之日矛が渡来したとしその渡来の理由<sup>なにな</sup>を難波<sup>なにな</sup>のヒメコソ社のアカルヒメ神を追いかけてきて来てしまったと記す。

### 1. ツヌガアラシト

垂仁天皇の時、越<sup>へし</sup>の国筍飯<sup>たけのこ</sup>の浦<sup>うら</sup>に額<sup>かぶ</sup>に角<sup>つめ</sup>が生えた人が一つの船で到着した。これがそこを角鹿<sup>つめが</sup>と呼ぶようになった由来だという。

どこの人が尋ねると「<sup>おおから</sup>大加羅国の<sup>おうじつぬがあらしと</sup>王子都怒我阿羅資等、またの名<sup>うしきありしちかんき</sup>宇斯岐阿利叱智干岐という。

日本の聖王に会いたくてやってきた。<sup>あなと</sup>穴門(長門)に着いた時、その国王<sup>いづつひこ</sup>伊都都比古に会ったがその人となりを見てこれは王ではあるまいと思い退去して出雲を経てここにやってきたという。(日本書紀)アメノヒホコ説話がほぼ天日槍の到来内容と同じで紹介されている。そしてタジマモロスク以下数世代に渡って日矛の家系が詳細に記述されている。(古事記 応神天皇記)

#### <sup>いづし</sup>出石神社と天日槍伝説

円山川を遡る直近の場所にある居住地は出石地域でありここがかれらの生活基地になり日槍を祀る出石神社付近がその中心になった。但馬国一の宮である「出石神社」には、但馬開発の祖として<sup>あめのひやり</sup>天日槍が祀られている。

天日槍は新羅国の王子で日本国に聖皇がると聞いて渡来した。宇治川(淀川上流)から若狭に出て、日本海を西に出発点の但馬国に到り住み付いた。(日本書紀)

但馬に到る前に播磨で<sup>いわ</sup>伊和大神と合戦をしたとし(播磨国風土記)、「古事記」では逃げた愛妻を追って<sup>なにわ</sup>難波(大阪)に至ったとしている・この時代には難波の津はまだなかった。

豊岡盆地周辺では天日槍による湖沼開発伝承が多く残されている。出石神社の由緒によると天日槍は泥海であった但馬を、円山川河口の瀬戸・津居山の間の岩山を開いて濁流を日本海に流せば耕地を開けることを察した。このため土木工事に必要な鉄製の工作具スコップやツルハンなどを製作し、一大開削工事を行った。湖底にあった泥水を海中に放ち、現在の豊岡平野が出現した。その結果農業ができるようになり、<sup>きりゅう</sup>杞柳の栽培を教え、<sup>すゑき</sup>須恵器(高級陶磁器)を製して殖産興業に功績を残し但馬平野の基盤を築いた。

現在の豊岡市のほとんどは日槍の開発により陸地になったものであるという。

注)杞柳:柳の枝を原料とする<sup>こうり</sup>行李や容器

#### ① 播磨国風土記

図1. 1-1は伊和大神を祀る伊和神社(兵庫県宍粟市)

播磨揖保川上流の宍粟にある伊和大神である葦原志拳乎命と争いになり日槍が敗北した。



シコオはオオクニヌシの別名であるが彼は80人もの子供がいたと言われているので伊和神はその4代目に当たる播磨の有力者と思われる。播磨風土記には両者が葛藤した証拠である戦いに絡む様々な名前が残されている。

る。

## ② タジマモリ

天日槍の三世孫田道間守は、垂仁天皇の命を奉じて常世の国に「非時香木実」を求めて旅だった。ついに求めて帰ってみれば、天皇は崩御のあと。田道間守は御陵に木実を供え、嘆き悲しんで死んだ。非時香木実はいまの橘である。田道間守は中嶋神社(豊岡市)に祀られている。

\*\*\*\*\*

以上が天日槍や天之日矛と称する渡来人の記紀や社殿から窺い知ることの情報であるが、いつの時代、何の目的で彼らがやってきたのかはもう一つ明確でない。しかし掘り下げて追及していくと本当の姿が見えてくる。

## 2. ツヌガアラシトの来日目的

中国大陸の長江流域から戦国時代、韓半島に住み着き国を作った倭人たちは、海を隔てた対岸に広い未開の土地が広がっていることに注目していた。1世紀を過ぎるころから寒冷化の影響で海面が下

がり列島各地に海岸線に沿って広い潟湖(ラグーン)を伴う平野が出現していた。列島中心部の関西地区に進出する半島からの移住者が激増していた。この状況を観察していた天照神が開いた

きんかんかや  
金官伽耶の支配層は出雲国の大王オオクニヌシに支配権を譲るように要請した。難渋したが大規模な戦争は無しに交渉は成立した(2世紀中頃)。天照系の倭人は集団で九州に移住し、更に本州の中心部を目指して移動を開始していた。一方出雲の国を支配していた軍人や官僚など特権階級の有力者はスサノオの父祖の地「高霊」に戻らずを得なかった。しかし寒村の地、高霊盆地には何もなく人々は生活に困窮し、数十年に渡る内乱に明け暮れた(倭国大乱)。中国の三国志にも記述されているように戦争や気候変動による一過性のもので無く長期間の混乱で、オオクニヌシ系支配者の統治が機能しない無政府状態であった。

以下は大伽耶が発展して金官伽耶に替わる大王国に発展した姿から推定した筆者の考察である。この混乱を收拾・解決したのが邪馬台国の卑弥呼女王であった。彼女は金城(現慶州)や金海(現釜山市)周辺で鉄が生産され、鉄の貨幣として物資の売買に使われていることを知っていた。彼女はこれに注目し高霊盆地周辺からもたくさんの鉄鉱石があるはずだとの信念を持って近くの山を調査しそこから産出する鉱石を用いて鋼の原料である銑鉄を作ることに成功した。仕事にあぶれていた人たちは熱心に取り組んだ結果急速に生産を増やすことに成功した。彼女は巫女として扱われているが祈りで国が豊かになる訳では無く、実業家として打った企画が成功したのである。大王家の子女のような存在では無くアイデアウーマンでかつ実業家であったと想像している。

### ① 鉄の販売ルート確保

出雲での生活体験のあった邪馬台国の人々は近畿地方で鉄が著しく欠乏していることを知っていた。天孫降臨で有力者を列島に送り込んだにも関わらず一向に社会が豊かにならないのは鉄が不足していたためであった。

九州にはかなり届いていたが関西や中国・四国地方の本州中心部へ鉄のような重量物を輸送する

手段が無かったのである。手漕ぎ船は2ノット「約4km/h弱」が限界で瀬戸内海は潮流の変化が激しく5から10ノットにも達することがあり当時の手漕ぎ船で航行することは困難だった。瀬戸内海は一本の大きな川と考えると良く潮の満ち干により一日2回東西に大きな流れが発生する。しかも食料の供給や休憩する設備が全くない交通不能の場所であった。船が使えるルートは日本海を経由するもので沿岸よりも、陸地で休憩しながら尺取虫のように1日15から20km位の航行をしていた。

邪馬台国の卑弥呼女王とオオクニヌシ系の王が相談して生産量の増えてきた鉄の販売先を開拓するため有力者を派遣することに決めた。選ばれたのが国王の長男ツマガアラシであった。渡来目的は明確で鉄を輸送するための航路と輸送手段をみだすことにあった。

記紀では「天日槍」とか「天日矛」だとか天照系の名前を付けているが大伽耶の王子(記紀では新羅)で来日して但馬の出石に住み着いたのはツマガアラシであった。記紀では天照系であると「天」を姓にしているが故意に付けたと思われるが、「ツマガ」が姓である。彼の来日は邪馬台国の卑弥呼と合意に基づいた行動であった。卑弥呼が魏の皇帝から下賜された100枚の銅鏡のほとんどはアラシの事業を順調に遂行できるように事業に参画した有力者に贈与され、後に彼らの関連する古墳や遺跡から出土している。その後古墳時代には国内産の銅鏡が無数に出土しているがアラシが直接関与した施設からの出土品以外は後に作られた国内産の品物で、三角縁神獸鏡であっても卑弥呼に贈られたものとは関係のないものである。

## ② アラシの最初の行動

日本書紀の記述の中でかなり信用できそうな、いきさつを選んで書き出してみると王子一行は武装した集団でやってきており同じ鉄の仲間である息長氏一族も同行していた。韓半島邪馬台国(後の大伽耶国)から船で渡来し、最初但馬から円山川を遡上して播磨国(兵庫県)の揖保川上流の穴粟村に到着した。天皇が使いを出して問い合わせたところ「自分は新羅の王子である。日本

に聖王がいると聞いて弟に国を譲ってやってきた。」これを聞いた王は「播磨のシサワ村でも淡路島イデサノ村どちらか気に入った方を選んで住みなさい」と彼らに言った。シサワ村は円山川の最上流から山を越えて播磨の揖保側に渡る要衝の地(姫路市の西北)でその当時輸送の重要拠点になっていた。また淡路島は運んできた鉄素材を鋼にし工具などに鍛造する工場を設置する立地条件に恵まれていた。アラシは山を越えて瀬戸内海に入るにはどの川筋を利用するのが最も良いのか詳細に調査するつもりでいたから諸国を巡り歩いて住む場所を選びさせてくださいと申し入れた。

アラシは淡路島に渡り紀国(和歌山)を経由して近江周辺を調査している。これが当時の代表的ルートで淡路島と島伝いに渡ることができた紀伊の紀ノ川が大和に入る大切な拠点であった。神戸から淀川に沿って大阪平野に達するルートは後の時代になってからである。若狭の国を経て日本海側の大河、由良川周辺を特に念入りに調べた。由良川から加古川の上流を繋げるとで大きな山越えをしないで瀬戸内に達することができる事を把握して再度但馬の国に至りここ出石の地に定着した。

### ③ 淡路島の鉄

淡路島は石器時代から続く交通の要所で縄文の遺跡も確認されている。弥生時代の前期・中期の人口は微増程度だが、後期になると北淡路では200m程の高地に人々が移動し、遺跡数が7倍にもなっている。淡路市黒谷五斗長地区では弥生時代後期の建物跡が12棟も確認されている。建物内に炉跡があり、鉄製品や素材、鉄器づくり用石製工具類などが出土した。この遺跡は鉄器生産に特化した工房跡であった。大規模な鍛冶工房跡である「淡路島垣内遺跡」はアラシの活躍がほうふつと湧き出してくる場所になっていて古墳時代へどんな形で移っていたのかヒントが隠れている所。国生み神話の最初に淡路島を挙げるのはこれから来ていると思われる。瀬戸内海が不通の時代日本海側から運ばれてきた荷物は揖保川(兵庫県たつの市)経由で淡路島に届き

半島と畿内を結ぶ交通の要所として重要であったのである。

### 3. アラシトの渡来時期

日本の時間軸はX天皇Y年表記のため西暦A年のように客観性をもたない。しかもその大王(天皇)の順序がかなり操作的に作られていて混迷を与えてしまっている。

神武朝から飛鳥に王朝が定まる間いくつもの王朝が設定され、それが1本の王朝が連綿と続いていたような操作が行われたために日本の古代史は年代記になっていないのである。

辛うじて判明できるのは中国や半島の歴史書に記載されている内容から類推できる事柄である。

#### ① この時期存在した王朝

◆**神武王朝** 神武から開化まで9代の王が糸島半島に王朝を開いた。公式にはBC660年からBC98年とされている。内容を検討すると神武王が天孫降臨のような形で王朝を開き魏志倭人伝にも伊都国<sup>いとこく</sup>として記載され彼の墳墓も当地に存在している糸島半島が実在有力視される王朝所在地である。それ以降の5代は家族が存在した程度で神社の神官のような存在だった可能性がある。特に第7、8、9代の3代は兄弟王朝でしかも皇后以外に王妃を数人かかえ子どもの数も爆発的に増えた。

◆**大和王朝** 神武朝最後の開化王の後、大和朝と称する崇神—垂仁王の2代が設定されていて崇神王は神武と同様初めての国を開いた偉大な王という設定になっている。実際にはそのような王は実在せず崇神王は武尊<sup>タケル</sup>(仲哀王)の、垂仁王は応神王を見本にして作り上げた創作王朝である事を筆者は解明した。

◆**蘇我王朝** 実質的な王朝の仕事を行ったのはこの王朝からである。ツヌガアラシトが来日し鉄の輸送ルートを開発して近畿地区に鉄の供給ができるようになっていった。彼らは丹後半島の開発に勢力を傾けていたが第5代目にタジマモリが生まれた。かれが九州各地に遠征した景行王で

九州各地に存在した多数の性格の異なる小国を一つの統合した国土としてまとめるための様々な努力をした偉大な王であった。その息子がタケルであり仲哀王であった。彼らは景行王の指示により関東地方から北陸に及ぶ広範囲の領域を支配下に収めるべく遠征を繰り返した。この王朝が卑弥呼の系統で蘇我(河内)王朝と呼んでも良い。

◆大和物部朝 天孫降臨でニニギ神が日本に向かう前に兄のニギハヤヒ神が大和に降臨していた。彼らは石上<sup>いそのかみ</sup>神社の神官的な存在で正式な三種の神器を持たないためか神武朝の補佐的な存在であった。福岡(神武朝)と大和に分かれて生活していた人々が高速交通機関の全くない当時記紀に書かれているようなバックアップ業務が行えるはずがない。特に神武朝の王妃に大和物部朝の女性がいるのは疑問に思われる。

◆<sup>たて</sup>建 王家 アラシトが奈良盆地開発のために投入した彼の子息。紀伊の県主の娘との間にできた6人の男子が中心になっている。

② アラシトの来日時期は 230 年頃

即位	神武朝	大和朝	物部王家	即位	蘇我朝	建 王家
200	神武	*	ニギハヤヒ		*	*
223	綏靖	*	ウマシマジ	230	アラシト	建 斗米
246	安寧	*	ヒコユキ	253	諸助	建 田背
269	懿徳	*	イズモ	276	斐泥	建 諸隅
292	孝昭	*	オオミズクチ	299	比那良岐	川上真稚
315	孝安	*	ウツシコオ	322	景行	大矢田彦
338	開化	崇神	イカカシコメ	345	仲哀	大倉岐
361	*	垂仁	タケイココロ	368	応神	建振熊
384	*	*	タケモロズミ	391	仁徳	振熊宿祢

アラシト=天日槍/天日矛=建 斗米

表 1-3-1 関係王朝の代表的人物の即位年

神武王の即位年を200年として親子継承の場合1代は23年で引き継ぐものとした。これは朝鮮3国(高句麗、新羅、百済)の国王の平均在位期間から割り出した数値である。太字は大王(天武以降は天皇)である。神武朝の孝霊、孝元、開化は兄弟の王であるので1代と設定したの



で神武王朝は7代で終了している。その後、崇神王から大和王朝が始まったことになっているがこれは神武朝から蘇我朝に一本の線でくっ付けるための操作で開化から垂仁朝を通して架空の王や媛を乱造している。古事記には彦座王ひこいますおうの例が典型的です。彼は多くの女性を娶り子どもを生んでいる。実際に存在が認められそうな人と全く架空の人が混在しているが、実在の人はきちんとした夫がいる場合が確かめられる。

崇神・垂仁王は架空の王で崇神王は仲哀王を、垂仁王は応神王のやった業績を取り込んで操作し架空王朝を仕上げている。公式な天皇の順序は「開化—崇神—垂仁—景行—仲哀—応神」であり361年即位の垂仁の後に322年の景行が続く不思議な系図になってしまっている。想定される垂仁と応神の時期がほとんど同期の関係にある事からもアラントがやってきたのは230年頃と推定している。

九州で伊都国の王と会いアラントが権威を認めなかった人物は綏靖王すいぜいと考えられる。アラントの王朝は武、建(たけ)、竹一家が打ち立てたものであり「タケシ王朝」であるが全体として考えると「蘇我王朝と呼ぶのが」が最も相応しい。

日本書紀の応神記にツヌガアラントの到来を扱っているのは当然である。アラントがやってきた時期には、天照系のニギハヤヒ命は大和にやってきて数代が過ぎていた。出雲の国は天孫てんそん系に譲渡したというもののオオクニヌシの頃までに出雲から出てきて近畿や中国地方に定住していた集団がいた。紀伊・播磨きい はりま きび・吉備などには有力豪族が既に根拠を構えていた。

## 第二章 大和へ運ぶ鉄輸送路の歴史

日本海から瀬戸内に鉄を運び込むのには中国山脈を越えなければならなかった。鉄のような重量物は船で運ぶしかなく人力による手漕ぎ船に頼った。最初に取り組んだ<sup>まるやま</sup>円山川は峠の標高が300mでしかも<sup>ひきふね</sup>曳船にて越える必要があった。<sup>かこがわ</sup>加古川に出る航路は由良川と加古川が大河で接続し、標高約90mでしかも曳船せずに山脈を越えられる優れた輸送路であった。

帆船が登場してからは琵琶湖経由で大量の輸送が可能になった。このように数世代の懸命な努力が重なって日本の中央部に鉄が届いたのである。

### 1. アラシト集団が開発した鉄輸送路変遷

日本海から瀬戸内に鉄を運び込むのには中国山脈を越えなければならなかった。鉄のような重量物は船で運ぶしかなく人力による手漕ぎ船に頼った。最初に取り組んだ<sup>まるやま</sup>円山川は峠の標高が300mでしかも<sup>ひきふね</sup>曳船にて越える必要があった。(川の無い部分は船底に丸いコロを入れ人力や馬力で引っ張り上げること)

<sup>かこがわ</sup>加古川に出る航路は<sup>ゆら</sup>由良川と加古川が大河の末端が接続し、標高は約90mでしかも曳船せずに山脈を越えられる優れた輸送路であった。

帆船が登場してからは琵琶湖経由で大量の輸送が可能になった。このように数世代の懸命な努力が重なって日本の中央部に鉄が届いたのである。

#### ① 円山川 - <sup>いぼ</sup>揖保川ルート(ルートZ)

古来からの代表的輸送路で淡路島を経由して紀伊に渡り奈良に渡る道。

当初アラシトが狙ったのはここを使って鉄を運ぶことを考えた。地元のボス<sup>いわじん</sup>伊和神が反対し戦争にまでなった。しかし話し合いが付いてルートAができるまでここを利用させてもらったことが経緯か

ら分かる。

ルートZは日本海と瀬戸内の中間、朝来市<sup>あさこ</sup>の朝来IC(インターチェンジ)から西に429号線に沿って進み山道を経由して揖保川にたどり着く道で山越えが何カ所あり人の往来には問題なくても重量物の輸送には問題があった。姫路市の西部たつの市に河口がある。

## ② ルートA 円山川 - 市川ルート

市川ルートも朝来市和田野まではZと同じであるがそこから先、生野地区<sup>いくの</sup>は山間部で曳船の必要があった。この山越えルートの開発には数年はかかったと思われる(近くに生野銀山がある)。

## ③ ルートB 竹野川 - 由良川 - 加古川

由良川を経由して加古川につなぐ輸送ルートでほとんど高低差無く由良川と加古川が接続できる。日本海側からは理想的な道であるが丹後半島の先端経ヶ岬から宮津湾にかけての一带は岩場で船員が休憩する場所が無く毎日飲む水が得られないことから渡航不可能であった。このため丹後半島の中心にある大河<sup>たけのかわ</sup>「竹野川」を遡行して曳船で山を越えて宮津湾に運び出す大変なルート開発が必要であった。この道の完成により5世紀には大量の鉄が近畿地方に送りこめて大和の大開拓事業が進められた。5世紀は丹後半島が交易で最も輝き日本の中心になった時代である。

## ④ ルートC 敦賀<sup>つるが</sup> - 琵琶湖 - 淀川

応神王の時代 秦氏による技術により帆船の運航が可能になり敦賀まで短時間で鉄が運ばれて琵琶湖経由で鉄も人間も運ぶことができるようになった。琵琶湖が交通の中心地になり琵琶湖沿岸と淀川に沿った地域の大開発が進められた。雄略王の時代以降は瀬戸内海に帆船が通れるように休憩施設や物資の供給施設が徐々に整えられて瀬戸内海航路の開発が進み後の時代の盛況につながった。

## 2. ルートZは古くからの近畿進出ルート

弥生時代からこの当時まで日本海から近畿地方に進出する典型的なルートは決まっていた。

但馬の円山川を遡って現在の播但連絡道に沿って南下するルートである。コースは円山川を

遡上して朝来市新井駅付

近から429号線に沿って西

側に山道をたどると揖保川

の源流に出合う。暫くする

と播磨一の宮である伊和

神社がありここが宍粟邑

の中心になっていた。ここ

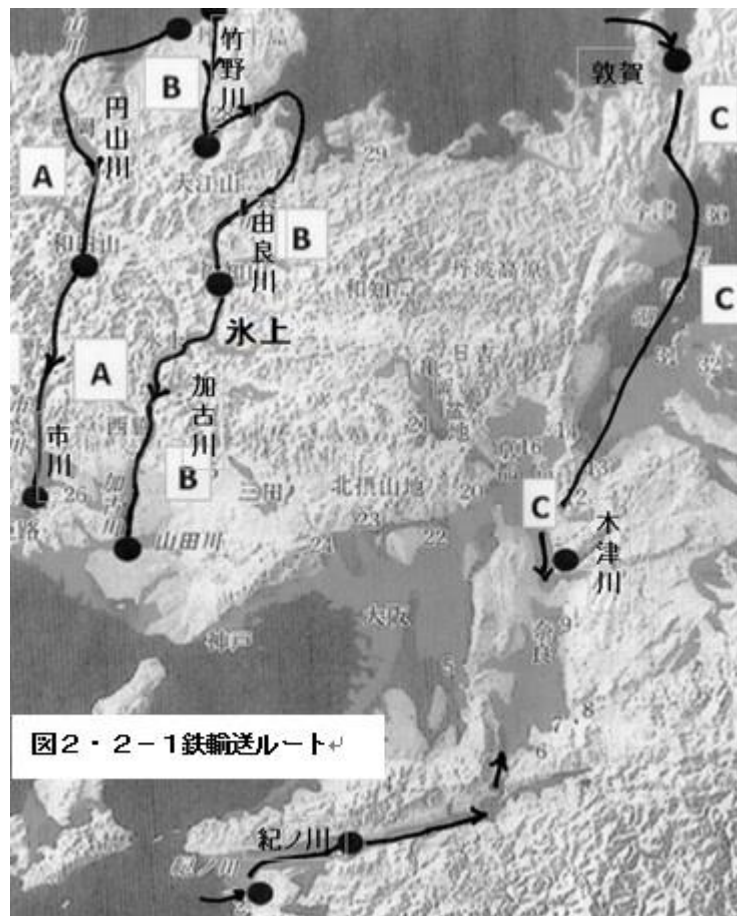
から揖保川の下流までは

船で一気に下降することが

できた。最初アラシはこ

のルートを輸送の本命にし

ようと一帯を支配していた



伊和神と交渉したが決裂し、宍粟で争になってしまった。多勢で地理に明るい地元播磨勢との争いは勝つことができなかった。人の往来には特に問題はないものの、鉄のような重量物を扱うには適していないと考えたが新しい輸送道を開発できるまでの間はここを使わせてもらうしかなく、交渉によってここからしばらくの間、近畿に運んだ。

アラシが来日する前、苦勞の末姫路まで銑鉄を運び込み明石海峡の潮の流れが緩くなる時

間帯を利用して淡路島に接岸しここに作られていた工場に原料を運び込んだ。この淡路島には鉄の製錬<sup>せいれん</sup>や鍛造<sup>たんぞう</sup>をやり需要に応じた鉄製品を作った工場跡が残っていた。国生み神話で淡路島がオノコロ島の次に現れる重要な位置を占めているのは関西の拠点<sup>あしわら</sup>、葦原の中心と見られていたからだと思われる。淡路島からは小さな島伝いに紀州に渡って紀ノ川<sup>きのかわ</sup>沿いに進み五條市<sup>ごじょうし</sup>經由<sup>かつらぎさんろく</sup>葛城山麓方面から大和に侵入するのがメインルートになっていたようである。紀州は大和に鉄を運び込む拠点で出雲港と和歌山港が海路輸送の最も重要な場所であった。淀川<sup>よどがわ</sup>や大和川<sup>やまとがわ</sup>、難波の運航はもっと後の時代になって利用可能になったのである。

### 3. アラシの鉄の輸送路開発の方針

韓半島先端の金海港から運び込まれた鉄を中心にした貨物は日本海を渡ってきた外洋船から陸を曳船出来る専用船に積み替える。アラシ一族が開発しながら導入して実行した仕組みとそれを達成するために行った巨大な土木工事の姿が浮かび上がってきている。

その基本ルールは以下のようなものであったと推定できる。

#### ① ブロックと管理責任者

長い輸送ルートをいくつかのブロックに分割してその責任者を定める。このブロックが変更になる所で船・乗組員・積み荷が全て入り替えられる。このためには大規模な港湾設備が必要になる。

#### ② 港湾の建設

潟湖(ラグーン)の浅瀬では船の係留が困難なため台地や丘陵の一部を利用して最適な場所を選んで深さ5~10mの掘削を行い船が横付けできる岸壁が必要であった。掘っただけでは川砂で埋まってしまうので濠のような形にして堤防を築いて、川砂から濠と岩壁を守る。掘りだした川砂の山ができるのでこれを集めて台地を作る。

返り船、積み荷を運んできた船、修理中の船、休憩中の船など多数の船が動き回るので最初

から適切な場所を選んで長さ100mを越える大規模なものが作られた。

大陸から運ばれる荷物は9月以降3月までの冬季間は荒波で輸送が途絶えるので関西地区に送る時間調整も必要になり港の規模は最初から大きいものが必要だった。

これらの建造物が崩れないように岩壁に相当する傾斜部表面は葺石で守る。特に砂地を掘りこんだ崩れやすい周濠の部分を強固にした。

### ③ 前方後円墳の建設

港の所在地を走行中の船から確認できること、逆に港から船に情報を伝える機能が必要になる。現在の灯台の役割である。この目的に港の台地の一部を円筒状に盛り上げて最上部に櫓を組んで銅鏡を設置した。方形部には事務所や船員の休息場所に、場合によっては船の修理も行われた。この全体の形が前方後円墳であり後の時代には王様の巨大古墳として港とは関係なく無数に建設されることになった。

## 4. 魏の皇帝から卑弥呼に下賜されたの百枚の銅鏡

魏志倭人伝に記述されている卑弥呼の銅鏡については代表的なものとして三角縁神獸鏡がある。ところが最近の遺跡の発掘で判明したことは千面を越える大量の銅鏡が発掘されていてどうなっているのか疑問視されている。

卑弥呼がなぜ百枚もの銅鏡を下賜されたかについての考察

「卑弥呼が要求したものであった・・・なぜ必要としたか。」

アラシトが但馬で鉄輸送事業を開始した。その港湾の機能として灯台の役割が必要である・・・これに遠くまで届く球面の鏡を使いたかった。

235年頃には円山川の池田古墳の建設が始まっていた。アラシトが輸送路の進捗具合を卑弥呼に報告する際、魏から欲しいものとしてそのリストに銅鏡を上げた。何としてでも倭国を支配

下に置きたい魏皇帝は百枚の銅鏡を卑弥呼に下賜した。これはアラシトの要求に応えたもので韓半島からの銅鏡の出土品はほとんど無く日本各地から大量の銅鏡が出土している。銅鏡全体では 800 面もの数量が確認されている。銅鏡に製作年が明記されている銅鏡が全国から 11 面出土されていてこれらを出土地が判明しているの表示すると次表になる。

表 2・4-1 卑弥呼の銅鏡

記年銘	AD 年	形式	出土古墳	県名
青龍三年	235	方格規矩鏡	大田古墳	京都
青龍三年		方格規矩鏡	安満山古墳	大阪
赤烏元年	238	平縁神獸鏡	狐塚古墳	山梨
景初三年	239	画文帯神獸鏡	和泉黄金塚	大阪
景初三年		三角縁神獸鏡	神原神社古墳	島根
景初四年	240	斜縁盤龍鏡	広峯古墳	兵庫
正始元年	240	三角縁神獸鏡	蟹沢古墳	群馬
正始元年		三角縁神獸鏡	森尾古墳	兵庫
正始元年		三角縁神獸鏡	竹島古墳	山口
赤烏七年	244	平縁神獸鏡	安倉古墳	兵庫

これらは卑弥呼の鏡と見て間違いないと思われる。三角縁神獸鏡や方格規矩鏡などの鏡が有名だがこれらは中国の地からは発見されていないという指摘がある。しかし楽浪郡のあった平壤付近からは全てが見つかっている。製作地は朝鮮半島であったようでここに中国人が来て作り込んだようだ。舶載鏡とは中国で作られたもの、倣製鏡とは日本国内で作られたもの。三角縁神獸鏡や画文帯同式神獸鏡が 500 面近く発見されている。その中で舶載鏡だけが破鏡で発見されている。縁を磨いたりぶら下げるための孔をあけた例がある。

一方倣製鏡は無疵で発見されている。100 面の銅鏡はどのように配られたか。古墳の建設や荒地の開墾などを通じてお世話になった人々に直接贈られた。間接的には息子を經由して届いていると思われるが、その百枚近い神獸鏡をリストアップするのが夢である。筆者の見方は舶載鏡を平壤で作っていた専門家集団が 250 年代には関西地区に移住して倣製鏡作りに

入っているので鏡を見ただけでは区別が付かず、どこの人に贈ったものか、どんな使われ方をしたもので判断するのが魏皇帝下賜品かどうかの判定基準になる。

### 第三章 輸送路Aの開発

#### 1. 豊岡湖を排水工事で農耕地に

出石に居住したアラシと仲間が取り組んだ課題は鉄を積み込んで円山川を遡上することと上流の山間部である生野地区<sup>ひきふね</sup>を曳船で市川を通して姫路につなぐルートの開発であった。曳船とは水の無い所を船を引っ張って越えること。船の底に分厚い板が付いていて丸太などを下に敷いて坂



を登る。人が引くことが多いが馬が使えるようになったときは馬に頼った。出石神社の由緒の内容によると現在豊岡市の市街地になっているほとんどが大きな湖面になっていた。家や農耕地があるのは出石地区のみであった。このため河口の瀬戸・津居山間の岩山を

切り開く一大開削工事を行った。そのために工事に必要なツルハシ、シャベル、運搬具などを作り出す鉄工所を出石に設けて工事を助けた。アラシの工事の結果ほとんどが陸地になり豊かな



農村地帯を生み出した。素焼きの赤い、割れやすい土器(土師器)とより最先端の高温・還元雰囲気で作られる薄くて割れない須恵器の壺まで作り出す土地に変わった。豊岡は有名な城崎温泉のあるところ。

## 2. 和田山の池田古墳

朝来市和田山町平野にある前方後円墳全長 141mの池田古墳は、日本で最初に作られた前方後円墳と考えている。墳丘は3段築成で葺石と盾型周濠を持ち埴輪が飾ってあった。盾形周濠とは古墳の墳体に沿って同じ幅で周濠を設置するのではなく、写真のように弁当箱または弓矢から身を守る盾のような形で古墳全体を覆ってしまう形式で水の貯蔵量を多く確保できる。

埴輪は水鳥で23体もの数量が確認されて全国最多の記録を持っている。その他家形埴輪、壺形埴輪、円筒埴輪も保持されていた。渡土堤を持ち円形部と方形部のつなぎにで



っぱりがある造出部を備えていた。明治期に鉄道工事で土砂が採取され埋葬施設は消えしまったが、池田古墳の北西4Kmの高田に竜山石を使用した長持形石棺の蓋石片があり、池田古墳の埋葬施設であった可能性が高いといわれている。

この池田古墳は前に説明したように鉄など重量物を船でここまで引っ張ってきて峠を越えて播磨の国へ引き下ろすためだった。峠を越える曳船の必要があり高度差や引っ張る道路状況に合致した船に乗り換えると同時に船員(クルー)もここで交代した。

それをこの水濠を利用して行った。後にはこれが古墳としてその地の王などの死者を弔う施設に変わっていった。アラントは輸送ルートの将来構想を考えていたがまずは少量で良いから確実に

に運べるルートを構築しなければならなかった。

池田古墳は港湾施設としてのプロトタイプであり港湾設備としての必要な要素は全て含んでいる。またこの古墳には装飾品や鏡・刀剣などの副葬品はほとんど入っていない。それらは周囲の小さな円墳や方墳にまとめて葬られていた。この古墳が作られたのは250年頃、アラシの晩年と考えられる。但馬一族は初代但馬国造アラシ(天日槍)のために長持型石棺をデザインし形と表面の紋章まで工夫した。おそらくこれが竜山石を使った第一号と思われるが大和や河内の王たちの時代には長持型石棺が必需品になっていった。

### ① 池田古墳と類似の古墳

但馬の船宮古墳(朝来市)、長岡京市<sup>けいかいやま</sup>恵解山古墳、姫路市<sup>だんじょうさん</sup>壇土山は同じデザインで、3倍のサイズが堺市<sup>さびやう</sup>御廟山(応神陵)古墳、3.5倍が仁徳天皇陵古墳である。箸墓古墳も<sup>たてがた</sup>盾形周濠を持っていて池田古墳の類似タイプだといわれている。

### ②王者の棺「長持形石棺」

兵庫県高砂市周辺で産出される竜山石を用いた長持型石棺は、独特の形からこの後の時代にも天皇の墳墓に良く使われ「王者の石棺」と呼ばれている。瀬戸内海は船が通れなかった時代市川ルートから運び上げたとしか考えられない。蓋だけで1トン、全体では7トンにも達する重量物を曳船で和田山町に引き揚げている。初代但馬国造ツヌガアラシの御魂を吊うためにはここまでやったと思われる。



図 3・2-2 長持型石棺



図 3.2-3 白鳥埴輪

### 3. 和田山が円山川上部の中心地

表 3・3-1 但馬の古墳

名称	時代	副葬品	備考
若水A11号 40m円墳 朝来市山東	3世紀 中旬	内行花文鏡2、飛禽鏡1、ガラス小玉 50 点 鉄器2、漆製品	但馬最古 円墳
城ノ山古墳 36x30m円墳 和田山町東谷	3世紀 中旬	方格規矩八禽鏡1、青蓋作四獣鏡1、唐草文帯重圈文鏡1、三角 縁神獣鏡3、碧玉製の石釧4、琴柱形石製品1、琥珀製勾玉3、硬 玉製勾玉5、ガラス製勾玉38、碧玉製管玉91、武器、工具など多 数	三角縁神 獣鏡に象 の文様あり
池田古墳 前方後円墳 141m和田山町	3世紀 中旬	長持型石棺、水鳥埴輪23、壺形・円筒埴輪、家形埴輪を持つ 古 墳は葺石、盾型周豪、渡土堤、造出部分が付いている	前方後円 墳にプロト タイプ
茶すり山古墳 90m円墳 和田山町筒江	3世紀 中旬	変形盤龍鏡、対置式二神四獣鏡、内行花文鏡、二仙四獣鏡 甲冑2、革盾2、玉類、刀剣類、槍鉾類、鉄鏃など武具類など約 1800 点、玉類、櫛、針、刀、鉄鏃の束、鉄製農工具など約830点 木棺直葬2基あり	近畿最大 の円墳 国史跡
船宮古墳 前方後円墳 91	5世紀	葺石、盾型の周豪(10m)、円筒埴輪、形象埴輪の中で鼻輪を持つ 牛形埴輪は珍しい、副葬品は未調査	周濠含むと 120m

但馬地区開発の中心は北部の豊岡の出石では無くて上図に示す山の上にある朝来市和田山町が拠点になっていた。ここには港湾機能を備えた池田古墳を作ることが第一目標であったが、これができた後は行き交う船や鉄製品などの管理のため大勢の人が居住する大きな町に発展していった。和田山駅の近くには池田古墳と近接して城ノ山古墳(円墳)が存在している。5世紀には

前方後円墳の中に死者を葬る石棺などと一緒に死者が生前に使っていた貴重品の多くが埋葬されるようになった。オリジナルな池田前方後円墳には死者の棺と墳丘を飾る埴輪などがあるだけで、副葬品は近くに小型の円墳を作ってそこに収める原則を作っていたようである。また子孫の墓地は円墳や方墳の小さいものに副葬品と共に葬られていた。



この地区で最初の古墳はわかみず若水古墳群だったようで40mの円墳があり卑弥呼提供の内行花文鏡が保存されていた。隣にある柿坪遺跡は大型掘立柱を備えた200㎡の床面積を持つ巨大建築物の跡だったことが発掘調査で判明した。但馬の王宮址と見られ代々但馬王(国造)が住み込み、役人が事務処理を行っていた。その西約1.5kmほどの所に2基の木棺を内蔵する「茶すり山古墳」(円墳で近畿地区では最大

の90m)がある。初代アラシの墳墓と遺品は池田・城ノ山両古墳に集められ、但馬国造2、3代目の但馬モロスケ、ヒネの遺品が茶すり山古墳に葬られているのではないかと想像している。この第1主体部には玉、刀剣、槍銚など武器類を含め1,800点が、第2主体部には第1と同じものの

他、工事で使われた農工具類など 830 点が展示されている。農工具類の展示はこの頃までに和田山での一連の工事が終了したとの意味合いがくみ取れそうである。茶すり山古墳の出土品は朝来市埋蔵文化センター「古代あさご館」(朝来市山東町大月)に展示されている。ここで注目すべきは曳船の動力として馬がかなり使われていたようでその骨がまとめて出土している。

初代アラシト王の遺品が保存されている城ノ山円墳には三角縁神獸鏡3点を含む6点の鏡が保存されている。いずれも卑弥呼から直接頂いたものと思われる。その中に象を彫り込んだ黄金色の一品がある。これは100枚の中の特別品ではなかったのではないかな？

円山川に沿った平地には作業者の住宅や墳墓群が並んでいる。作業者はここから通勤して作業に励んだ。

#### ① 岡田古墳群

和田山の右に流入する東河川がある。この上流に岡田古墳群があり、前方後円墳2基(小円山、長塚)と小円墳5基が存在している。この川筋から鉄粉が産出されるのでそれを加工して工具などを作っていたという。鉄や製品の輸送に離れた場所にある2ヶ所の古墳から運ばれたものであろう。

#### ② 船宮古墳(朝来市桑市)

茶すり山古墳から上流 7.5kmに大型前方後円墳がある。ほぼ「あさご館」の近くで、なぜここに池田古墳と同規模で形も同じものが作られたか疑問であった。和田山の川の位置が池田古墳のあるポイントから大幅に右岸に寄って現在は流れている。これから類推すると上流からの土砂の蓄積で川が移動してしまい港の機能が無理になった。このため同じ設備を川幅の狭い上流に作ったものと思われる。

### 4. ルート Z: 揖保川水系の古墳

表 3・4-1 揖保川の古墳

名称	時代	副葬品と所在地	備考
吉島古墳 前方後円 109m	3世紀 中旬	前方部撥型 葺石や埴輪はない 竪穴式石室 副葬品不明 たつの市新宮町吉島 三角縁銅鏡3を含む銅鏡6、ガラス玉など 250mの尾根の上により水濠は無い	最古式 古墳
養久山1号墳 前方後円 32m	3世紀 中旬	撥型方墳 石室1、石棺5 銅鏡や鉄剣、玉類出土 40基の古墳群 たつの市揖保川町養久	最古式古 墳
瓢塚古墳 前方後円 109m	3世紀 中旬	撥型方墳 周濠はなし堤防を切り崩して作った 竪穴式石室あり 姫路市勝原丁	
興塚古墳 前方後円墳 110m	3世紀 中旬	揖保川河口潟湖の山上 竪穴式石室あり 墳丘表面に葺石・埴輪 あり 瀬戸内海上輸送作業の拠点 たつの市御津町黒崎字基山	港の役割 を担う

円山川の上流から曳船で揖保川に船を渡してたつの市の海岸まで荷を運ぶ航路である。具体的には新井駅の先、朝来ICの所で合流する支流に沿って県道429号線沿いをたどる。峠を越えて一宮町井内で揖保川の支流と遭遇するのでそこから一路船で下降する。瀬戸内海に近い所に古墳が表のようにいくつか見られる。内容を検討してみると前方後円墳の形はしているが山を利用した古墳であって周濠を持たない。池田古墳とは異質のものである事が分かる。揖保河口から瀬戸内に乗り換える起点は御津にある興塚古墳でおこなわれた。

人々の往来のルートとしては適切であっても鉄を運ぶには困難なため鉄の運搬主力には使われなかったものと思われる。しかし三角縁銅鏡が何枚も出ているのでアラシトの意向が入った運搬路の整備計画の建設だったと思われる。

## 5. 市川ルートの建設

表 3・5-1 市川水系の古墳

名称	時代	副葬品と所在地	備考
壇場山古墳 前方後円墳 143m	3世紀 後半	葺石、埴輪、周濠を備え造出が付く 長持式石棺あり 円筒埴輪や形象埴輪 鉄鉾、刀剣 姫路市御国野町国分寺 陪塚2基保持	池田古墳と 同サイズ
山之越古墳 方墳 60m	同上	幅15mの周濠を備える。葺石、埴輪を備え長持型石棺を持つ 鏡、刀剣、玉類が出土 場所は壇場山に隣接	

円山川から市川に渡るためには現在播但線「生野トンネル」になっている約1kmの区間を曳船で乗り越える必要があった。標高は朝来市小和田 290m、生野町 320mでこの間にある最高位は330mである。これを越えると生野銀山で有名な生野町があり大河「市川」が流れている。曳船で越えるために道路の建設工事が行われた。

姫路市内姫路城の近くを流れる市川の河口には和田山に見られた大型前方後円墳壇場山古墳があり、王の宝物を内蔵している山之越方墳が認められる。この遺跡のある御国野町国分寺は現在の市川の川筋から東にあり海岸線からもずいぶん離れた場所にある。その当時の河口がここにあり淡路島、紀州に運ぶ船に入れ替え作業が行われた。

## 6. 但馬氏の系図

但馬国造	王	役職	妻	子ども
1	天日矛	但馬国造	マタオ：出石県主	モロスケ
2	天諸助	但馬国造	マエツミ：丹波国造	ヒネ
3	天日根	但馬国造	オオトミ：国造	ヒナラキ
4	天ヒナラキ	但馬国造	ワヒジ：県主	スガヒコ、モリ、ヒダカ
5	天スガヒコ	但馬国造	メイヒメ：大和当麻	モロオ、ユラトミ
6	須賀モロオ	出石県主	タツガ：県主	スガヨシオ
7	須賀ヨシオ	出石県主		
8	須賀ヒタル	出石県主		
9	須賀イソベ	郡司		
10	須賀ウエノ	郡司		

アラシトを古事記的表現で「天日矛」と呼ぶ。限定された但馬<sup>あめのひほこ</sup>一帯の国造であるが実際は丹波・吉備・大和などと交流が強く有力者は出石や大和葛城の地で生まれ育っている。王たちが選んだ相手は出石周辺<sup>あがたぬし</sup>の<sup>たじまもり</sup>県主(郡規模)の娘が多い。4代目ヒナラキの息子田道間守は景行王として鉄の流通をのみならず軍事や政治・経済面に進出する大王になっていった。またヒダカは清彦の娘と結婚する。有力者の結婚相手はそれなりの格を持つ豪族の相手が多いので近親同志の結びつきが多くみられる。現代では考え難い組み合わせであるが、この時代生まれる女の比率が低い



はどんな事情があったのだろうか？

モロオは須賀姓になって、それ以降出石地区の管理者には須賀系が続いていく。5代までは天照系でないのに記紀では天を使用しているが万世一系の立場から組み込まれていると考える。

### ① 田道間守が景行天皇

日本書紀に垂仁天皇に橘の実(みかん?)を所望されたタジマモリが常世の国に去る話載っている。神仙な秘密の国で橘を探しまくって十年たっても帰ってこれなかった。万里の荒波を越えてやっと帰ってきたら垂仁王は既に亡くなっていて、タジマモリは生きている意味がないと嘆き悲しんだとされている。垂仁王陵とされる大きな古墳の中にはタジマモリの墳墓と称する小島が存在している。日本書紀の景行記を読んでいて驚いた。景行天皇は紀伊の国への行幸を計画し、占うと凶と出たため行くことを中止にした。代わりに屋主忍男武雄心命を派遣した。彼は紀伊の阿備・柏原にて神祇を祀った。九年間住んで紀直の祖ウジヒコの娘カゲ媛を娶ってタケル(武内宿禰)を産ませたと書かれている。常世の国とは紀伊のこと、アラシト以後親密な関係を築いた紀伊で大切な息子の養育を行っている。行動派のタジマモリに十年間もここに住み着いたとは考えられない。

大王の代理で派遣された人は景行王の本名そのもの「忍男武雄心」であった。この記述でタジマモリを派遣したのは垂仁王ではなく景行王自身であった。(景行王＝タジマモリ)

垂仁王は架空の天皇、日本書紀の記述では垂仁の子どもが景行王と設定しているのでこのようなフィクションの構築が可能だったのである。神武王朝から全く別系統の景行王を引き継ぐのに孝霊・開化・孝元の兄弟王朝を作って皇子を増やし、おまけに大和朝廷と称して崇神・垂仁の2王朝をセットして日本の古代史を解明できない複雑極まりない混乱状態に落とし込んでしまった。

タジマモリを追っていくと王妃は播磨国稲日大郎媛であり大碓と小碓を生んだとある。妃は印南川(加古川)の近く日岡陵墓に葬られている。この記事でアラシトの鉄輸送ルートBが既に完成し



て4世紀の初め頃には動き出していることが分かる。景行4年には岐阜に行つて美人の八坂入媛と結婚し、7男6女を設けている。注目は吉備兄彦、神櫛皇子(讃岐国造)、稲背入彦(播磨別の先祖)など吉備・播磨方面の有力者を生んでいることである。同じ記紀の孝安記には大吉備諸進命、考靈記には若彦建吉備津彦命をそれぞれの天皇が生んだことになっているが天照系の王が国つ神系の子どもを作ることの矛盾がある。

古事記ではこの二人の吉備津彦が加古川の淵に神祭りをして播磨を入口として吉備国を平定したと記す。この吉備津彦が吉備に鉄を大量に送り込んで開拓を実行、豊かな国土に仕上げたのである。大吉備津彦は吉備上道臣かみつみちのおみ、若彦建吉備津彦は下道臣・笠臣しもつみちのおみの祖である。このルートBの開通により関西地区と吉備などに鉄が多量に行きわたることが可能になり淀川沿川の開拓が大規模に進められた。また奈良や京都方面への供給が和歌山を経由しなくても淀川・木津川などの河川を利用して運べるようになった。

## ② タケシと武内宿祢

日本武尊の誕生:偉大な王仲哀王はタケルであり武内宿祢でもあった。記紀に載っている名前をたどっていくと小碓命こうすみことがヤマトタケルである。16歳の時九州の熊襲建兄弟くまそたけるの討伐を父親から命じられる。この遠征が終了するや否や今度は東国の焼津、甲斐、信濃、上総など多くの従っていない国々を攻略することを命じられた。吉備武彦まきびと大伴武日連おおともたけひむらじを武尊に副将軍として従わせた。大和葛城では同族として暮らしていた尾張のミヤズ媛の所に滞在中に神罰しんばつに当って病没した。タケルが亡くなって白鳥になって飛び去る話が展開されているがタケル・成務せいむ・仲哀たけ・武(建)内宿祢うちすくねは全て同一人物であり神罰が下って無くなり直ぐに別人になって違う名前よみがえで甦る複雑な動きを書紀は好んで書いている。

タケルは成務王に生まれ変わり景行王の第4子とし、同日生まれの武内宿祢を大臣とした。成

務はほとんど何の記録も残らない架空の王である。

仲哀王は息長帯媛<sup>おきながたらし</sup>を皇后にした。熊襲が叛いたとの報に接して日本海を南下し穴門<sup>あなと</sup>(下関)の豊浦宮<sup>とようらぐう</sup>に住まわれた。皇后神功<sup>じんぐう</sup>が熊襲退治よりも神が言われる新羅を攻略すべきだと主張したが仲哀王は反対した。王は神に逆らったことが原因で翌日には死んでしまった。後の処理は大臣の武内宿祢が全て取り仕切ったとある。神功皇后を卑弥呼女王に設定したい願望があっても男の仲哀王を生かしておくことができず、色々な細工をしてその存在を隠している。良く検討すれば「タケル(少年時代)→成務王＝仲哀王＝武内宿祢(建内宿祢)」であることが明瞭になる。

### ③ 建(たけし)一族の構成

ツヌガ・アラシトは記紀には天日槍とか天日矛などと呼ばれていて相応しい呼び名が無かったのでその一族を調査して「建」(たけ)集団と呼ぶのが最も理に適っているように思われるので以下に紹介する。アラシトの子どもは但馬出石のフトミミの娘マタオとの間に但馬諸助が生まれた。この1人の子どもから丹後半島の世界が広がったにしては不可解なことが多すぎた。アラシトは紀伊にもう一つの家庭があった。紀伊国造の知名祖<sup>ちなそ</sup>の妹との間に6男1女の7人もの子供がいたのである。勘注系図や海部氏系図によるとアラシトは紀伊・大和では建斗米<sup>たけしとめ</sup>の名前で表記され妻は中名草媛<sup>なかなくま</sup>で長男建田背<sup>たけしたせ</sup>(勢)、次男建宇名比<sup>たけしうなひ</sup>、三男建多乎利<sup>たけしたおり</sup>、四男建弥阿久良<sup>たけしやあくら</sup>、五男建麻利尼<sup>たけしまりね</sup>、六男建手<sup>たけしたわね</sup>和祢<sup>うなひひめ</sup>、妹宇那比媛<sup>うなひひめ</sup>の面々である。九州や日本海側から奈良盆地に行くには淡路島を経由して紀ノ川を経由しないと行くことができなかった。現在の和歌山市は最重要地点であった。筆者の想像では韓半島からの船便が途絶え、現場工事もできなくなる冬場、一家は紀州に引っ越して生活を送っていたものと思われる。この習慣は代々引き継がれタジマモリは紀に滞在中、国造宇豆彦<sup>うずひこ</sup>の妹、山下影媛<sup>かげひめ</sup>との間に生まれたのが建内宿祢<sup>たけうちすくね</sup>(タケル)である。生誕の地には武内神社が鎮座している。また武内宿禰<sup>たけうちすくね</sup>(タケル)が紀の宇豆彦<sup>うずひこ</sup>の娘宇乃媛<sup>うのひめ</sup>を娶り葛城高尾張の王宮にて木角<sup>きかく</sup>、波多<sup>はた</sup>、巨勢<sup>こせ</sup>、石川<sup>いしかわ</sup>、平群<sup>へぐり</sup>、葛城らの各宿祢ら男7人、女2人の子を産む。武内宿祢が大勢の子どもを作り奈良盆地の各地に送り込んだのでこの盆地は彼らの名前を頭にした豪族で場所取り合戦のような観を呈している。

このように建一族は紀伊と強く結ばれていて大和の南部は日本武尊(タケル)、武内宿祢、建内宿祢、武内街道など「タケシ」一族で溢れている。(一家は葛城地方に住んでいたのが葛城氏という呼び方もある)

## 7. 鉄に絡む武一家の業績

武一家は鉄を通して関西及びその周辺を次のように変えていった。

### ① 鉄の輸送路

半島から送ってきた鉄素材を瀬戸内に運ぶルートの開発。潟湖周辺の開拓と居住地の確保。

港湾設備を作り本格的に曳船を利用して円山川－市川ルートを確認し、山越えなしで繋がる竹野川－由良川－加古川のルートを4世紀初旬には完成した。

### ② 居住地の確保と稲作地帯の開発

加古川の港が完成し鉄の供給が活発になって来ると紀伊経由の他、淀川からも運ばれるようになり淀川周辺の開発が進んだ。木津川を經由して奈良盆地に入っていった。それらは鉄製農機具や工具ができるようになり国土開発の生産性が格段に大きくなった。とりわけ扇状地の扇頭部分に溜池を作って水を確保し必要な時に水田に供給するシステムを作りあげた。より大型のものが効率が良いので和田山で開発された池田古墳に近い形地のもっと大きな物が数多く作られた。

### ③ 古墳時代の到来

各地で大型古墳の建設が始まった。そのためには大勢の人が必要である。半島とはどんなシステムで貿易がなりたっていたのであろうか？

鉄を受け取る代わりにそれと同等の鉱物や貴金属などと交換した貿易は一部ではあったが主力は別であろうと考える。

筆者の想定では日本への渡航費だったと思う。船に乗る時費用を払う。しかしそんな大金は持ち合わせていないので保証人が人物を見て船に乗せる。その人が持っている特殊技術・技能に対してである。日本でそれらの技能を使ってできた品物、埴輪、銅鏡、イヤリングなどに対して支払う。一番比重の大きいのは耕地を借りて稲作を行う事で作った収穫物の7～8割方を税金として回収して本人の渡航費を回収することにあつた。この辺の商社的業務を担当したのが和爾氏の大きな

仕事であった。このシステムが機能して古墳が各地で作られた。

④ 渡航費を払い終わると税額も下がり豊かになった人々は豪族や王の墓として古墳を作るようになった。墓に収めるために武器や武具まで作って豪華に飾りたてたがこれは行き過ぎで禁止令がでた。日本に渡ればいい暮らしができると思った大伽耶の人々は大挙して移民した。韓半島最強の軍隊として誇っていた倭国軍(大伽耶軍)は櫛の歯が抜けるように弱体化していった新羅や百済に勝てなくなっていった。